

社会教育の未来を語る これからの社会教育活動、まちづくり

社会教育誌「ジャパン・ソーシャル・エデュケーション・アワーズ」
2021、2022 受賞者による対談

テーマ：
これからの社会教育活動、まちづくり
パネリスト：
2021年イノベーション賞
井上貴至（山形市副市長）
2022年イノベーション賞
諏訪玲子
(シェアリング・ラーニング共同代表)



●「まち」をキーワードにした連載
近藤・まずは、井上さん、諏訪さんのご紹介を簡単にさせていただきます。
井上さんの「新・まちづくり探訪記」は、(2023年10月号で)連載106回までました。連載が始まった2015年は、国立競技場を新しく作るために、日本青年館を港区虎ノ門に一時的に移転していました時期でした。

2015年の2月号では、中教審が提案した「新しい学び方は何か」という巻頭言があり、特集は、青少年育成と地域づくり、地域の元気づくり、子どももゆめ基金にクローズアップしていました。

2015年4月号では、「社会教育の政策づくり、マネージメント戦略的視点から現状把握と課題分析」という特集を企画しました。そういう時代に、連載が始まつたわけです。

諏訪さんは2022年7月号から連載が始まりました。その前の4月号に一度、原稿をお願いして、これは面白いということで連載をお願いすることにしました。

諏訪さんは2022年7月号から連載が始まりました。その前の4月号に一度、原稿をお願いして、これは面白いということで連載をお願いすることにしました。

井上さんが106回と、諏訪さんが16回。

井上さんの2015年1月号第1回目

この第1回目のところの、「まちの不思議を紐解いてみたら…わからない、わからない。本当にまちは不思議なところ…」確かにこのことを感じている方は、非常に多いのではないかと思います。
井上さんが、本誌の「社会教育アワード」2021年のイノベーション賞、2022年は諏訪さんがイノベーション賞をとられました。このアワードは2019年から実施していますけれど、キーワードとして「まち」というのがかなり重要な「鍵（キーワード）」になつている

ことでした。
諏訪・お伺いしてみたいのですが、いつも何を書くかどのように決めていらっしゃるのですか？ 山形市のお話もありましたし、山形市以外のお話も結構書かれていたりして、すごく面白いですね。いろんな地域の事例が書かれていたかと思うと、逆に、山形市の中のすごくローカルな、「誰々さんが何々しました」といったお話を書かれています。視点が豊かで面白いなと思って、いつも読ませていただいています。

井上・第3週、4週目ぐらいになつて、今日は何が面白かったのか、自分自身の取り組みや、基本的にはその1ヶ月の間に出会つた方、思つたこと、起きたこと、本などについて書いています。
諏訪・必然的に山形にいるので、山形のことが多くなるのですが。静岡県焼津のみんなの図書館さんかくとか、いいものを見たら、それを伝えたくなつたりします。諏訪・基本的には、その1カ月にあつたこととか、出会つた人について書いているのですね。

井上・あとは読んだ本についてです。本が好きなのでしょう。だから、図書館もイノベーションしようと、山形駅東西自らの取り組んだものも紹介させていました。山形市では、今年度から文科省に職員を派遣しているのですが、文科省の皆さんもけつこう読んでください

は、「大阪の中学校の文化祭で、長野から15名の来訪者と地域間交流したエピソード」でした。連載2回目には、「まちの未来をデザインする市役所」、富山県氷見市役所の話が出でます。

一方、諏訪さんは、連載タイトルは、「まちの不思議 おもしろ探査日記」です。実は、始まつた時の探求は求めるの「求」だつたんですけど、第3回から研究の「究」に変わりました。高校生の「総合的な探査の時間」に合わせて、研究の「究」にタイトルの漢字を変えました。

特別企画：社会教育アワード受賞者による対談
社会教育の未来を語る

緑地課も頑張っていました。御城印のPRに、兜をかぶつてハーフマラソンを走つてPRしたり……。そういうことをねぎらつたり、褒めたりしながら各課を回っています。

週末や空いている時間は、マラソンもそうですし、自転車で、まちの中を回つたりしながら、「こうしたらもっと面白いかな」、「これ問題だな」ということを見たり、いろんな人に出会つて話を聞いていくという感じです。

近藤・市役所の組織も、どんどん変わつてきているような感じがします。特に山形市は新しいプロジェクトをいろいろ実施しているような印象を受けます。

井上・ありがとうございます。若手職員の政策提案チャレンジということで、こちらから言うだけではなく、管理職は若手職員のやりたいことをできる限りサポートしようということでやっています。

部署、役職、年齢を超えてしっかりと対応していくこうということで、『自治体専用ビジネスチャット』ツールを入れるだけでなく、1500人未来創造研修をやつたり……。11月号に書きましたが、それを蔵王温泉地域に広げて、蔵王温泉の中で地元の東北芸術工科大学の学生と市役

えようと思つているのですか？

諏訪・連載の前に書かせていただいた記事（2022年4月号）で、ここに至るまでのことを書かせていただきました。

今、小学生と中学生の子どもが3人いるのですが、学校に行きたくない、宿題をしたくないとか言ってきて、どうしようかななど。そこで「宿題は本当に必要なんだろうか？」ということを思い、友だちに「うちの子がさ…」という話をしてもう少し、「うちもなんだけど…」と言つてしまったりして。すると「こんな本を読んだよ」と教えてくれる人がいたりして、みんなも考えたいのかなと思つたんですね。私も困つていて、みんなでそういうことを話しながら、勉強していくような場があつたらしいよね、というような話になつたので、場を作つてみたんです。そしたら、思いのほかたくさんの人人が来てくれました。

集まつて話をしていると、学校はどうしようかという話の中で、「学校を作ればいいんだよ」といった話が出てきたんですね。そしたら、ちょうど友だちが学校を作ろうと思つているという話をし始めたので、じゃあ今度は、その友だちに来てもらつて、学校を作りたいという話を

所職員が一緒に入つて、蔵王の未来を考えようというワークショッピングで、いろんなアイデア出ししました。場づくりとか、環境つくりを、すぐ意識しています。

諏訪・先ほどから「面白いことある？」と聞いて回つて、面白いものを探しにまちに行つて、という話をされています。「困つたことをどうにかしよう」というようなお話は、まちづくりによくあります。あるいは、面白いことを探しにまちづくりを、よく意識しています。

諏訪・面白いことを生み出そうといつた視点なんですね。面白いというのが、環境つくりを、よく意識しています。

諏訪・先ほどから「面白いことある？」と聞いて回つて、面白いものを探しにまちに行つて、という話をされています。とにかく素朴な疑問をちゃんと紡いでいるのが、すごく素敵だなと思っています。

諏訪・面白いことを生み出そうといつた視点なんですね。面白いというのが、環境つくりを、よく意識しています。

井上・楽しいこと、面白いことでないと続かないですね。同情とかは、多分1回しかできないので、少し寄付して終わるとか。楽しいこと好きなことは、続けられると思います。

諏訪・本当にそうです。

●みんなと悩みを話し合う場を作つた

近藤・おふたりの対談ということでお互いに何か聞いてみたいことがあります。特に、井上さんは行政の方で、諏訪さんは地域の方ですが、連載タイトルは『まち』で共通しています。その辺りからお

してもらおう。といった感じで、ずっとそれが続いているという感じです。

私の問題は、すごく目の前の問題だから、私自身の問題だつたり。でも、困っているのは私ひとりではないだろう。同じように困つている人がいるだろう。みんなでそれを話したり、共有したら面白いかなというか、ひとりで抱えてる痛苦しいけれど、友達と話すと、少し楽しくなるというところでやつています。

そういう場を作つていくと、わからないうこともまたどんどん出てくる。そこにいろんな立場の方が来てくれて、いろんな立場の方が來てくれる、それの立場からの見え方が見えてくる。今度は、かをまた改めて教えてもらおうとなつていく。いつまでたつても終わらないドミニオみたいな形でずっと連鎖が続いている感じですね。

井上・本当に最近、個別最適ということだと思いますし、これから第4次産業革命でAIの時代になると、やはり自立化とか個別最適化ということになる。教育ももつとそなならないといけないと思つています。

例えば、体育祭。今年は暑かつたので、人生100年時代の中で、健康で生きるために努力して逆上がりができるようになったとか、あるいはそれを通じて仲間を作つた喜びとか。体育のあり方は今までいいのかなということを日々、そのための社会教育にも、すごく通じると思うのです。でも、関心がある人にはアプローチしやすいのですが、関心がない

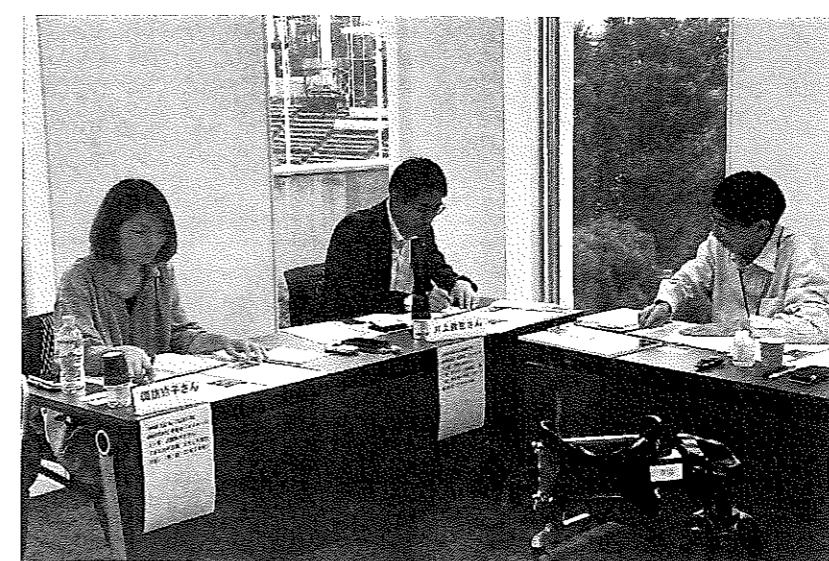
話を深めていければと思います。

井上・諏訪さんの素朴な疑問、まさにまちにいろんな不思議があるということ。その通りだと思います。

諏訪・うことに気づかない人もいるし、気づいても別に発信しない人もたくさんいる。そんな素朴な疑問をちゃんと紡いでいるのが、すごく素敵だなと思っています。

諏訪・どういうところで気づいたり、伝えていたら、面白いことを生み出そうといつた視点なんですね。面白いというのが、環境つくりを、よく意識しています。

井上・どういうところで気づいたり、伝えていたら、面白いことを生み出そうといつた視点なんですね。面白いというのが、環境つくりを、よく意識しています。



人にどうアプローチするかということを、みんなで考えていますよね。人生100年時代の中で、自分の健康をどうするか、歯の問題、ファットケアの問題とか、そういうことを少しでも意識している人たと、全然してない人はすごく差がつくのですが、関心がない人に、どうアプローチするかということをずっとと考えています。

●いろんなドミノがつながっていく

諏訪…私は子どもがいて、子どものことが気になりますし、元々教育学部だったんで、教育をテーマで見てしまします。教育で見るだけでも、そのドミノは本当にどこまでもつながっている。

例えば、子どもたちが学童保育に入れないので、市議会でどうやらそういう話をしているらしいとなつて、みんなで見に行つてみようとなつていったり。「宿題がなくならないのはなんでしょう」と考えていくと、文科省につながつていつたりもする感じで。

井上…面倒くさがらずに調べたり、アクセスしたり、聞いたり、問い合わせしたり、提案するのはすごく大事だと思うのです。その力はどこから生まれているんじゃないかなと思います。

やはり、前提になるのは、心理的な安全性というか、自分自身が親なり地域なり、いろんなところからきちんと愛されている心理的な安全性が、「新しく知りたい、学びたい」、「何かやりたい」という欲求の土台になる気がします。

諏訪…本当に、そうですね。「安全な」というか、心理的に負荷があまりかかるない状態になると、みんな好きなことを好き勝手にやりだすんじゃないかなと思っています。

「何をやってもいいよ」ということ自体がストレスになる方も、もちろんいるのですけど、プレッシャーに感じているものや疲れている状況から離れて、これから何をしていこうかとなつたとき、「そういえば自分は元々こういうのが好きだった」、「ちょっとやってみようかな」と動き出すときのものは、人によって全

然違つていて、100人いたら100通りになると思っています。安全性が確保された状態で、みんながそれぞれ好きな状態で好きなようにできているというのが溢れています。まちはすぐ面白くなるのだろうと、いつも思います。

●マンパワーに頼らず、もっとICTの活用を

近藤…2023年10月号（連載#16 「大人も民主主義を学ぼう」）に諏訪さんが、工藤勇一さん（元千代田区立麹町中学校長）のことを書いていました。実は以前、工藤勇一さんのことを、井上さんは井上さんのその連載は読んでいたいと思いますが、なにかシンクロしていますね。

井上…工藤校長の話を書いたのは3、4年ぐらい前（2020年5月号126～127ページ・「新・まちづくり探訪記 65 学校の「当たり前」をやめた」）です。

諏訪…そのころ、ちょうど工藤さんの学校の研修に通っていました。井上…私は、当時は内閣府の地方創生推進事務局で国家戦略特区の担当でした。

ですか。普通に言うと、面倒くさいじゃないです。

諏訪…そうですね。面倒くさくないわけではないのですけれど。やりたいが勝ちやうかなという感じはします。わからないことがわかった瞬間は、すごく面白いと思うのです。単純に生きる喜びといったところかなと思います。

私は今、国分寺のまちの中で、「投票率1位を目指す活動」をしていて、「投票

18回マニュフェスト大賞」の優秀賞を

「国分寺の投票率1位にプロジェクト」が受賞）、私は主に教育がテーマですが、他のメンバーは全然、教育はテーマではありません。20代もありますし、子どもがいない方もいらっしゃいます。もう子どもは育つちやつたという方もいらっしゃって、本当にいろんな多様なメンバーでやっているので、私が教育は面白くて、こんなにつながっていくのだよと言つても、最初の「教育」にそんなに関心がないと、私がお伝えしている連鎖には興味を持つてもらえないのです。

じやあ、その方は何に興味があるかなという話になると、「実は僕はコーヒーに興味があるのだ」という話になつて、今度はコーヒーから始まるドミノが無限

が始まる

井上…人への関心、人へのリスクペクト

いうのは、いつまでも続くのです。人それぞれの働き方も。これからあの会社に

用意するような感じで、つながり続け

るということを、みんなでやつていけたらといつ思っています。

●心理的な安全性から「やつてみよう」

井上…人への関心、人へのリスクペクト

いうのは、いつまでも続くのです。人そ

れぞれの働き方も。これからあの会社に

広がつていくようなことがあります。

それをやつていくと、最終的に誰でもど

んなことでもつながつていくんだなと、最近思っています。



井上…人への関心、人へのリスクペクト

いうのは、行政の側にいらっしゃる方々とい

うと、行政の側にいらっしゃる方々とい

うのは、白黒はつきりつけなきやいけない、

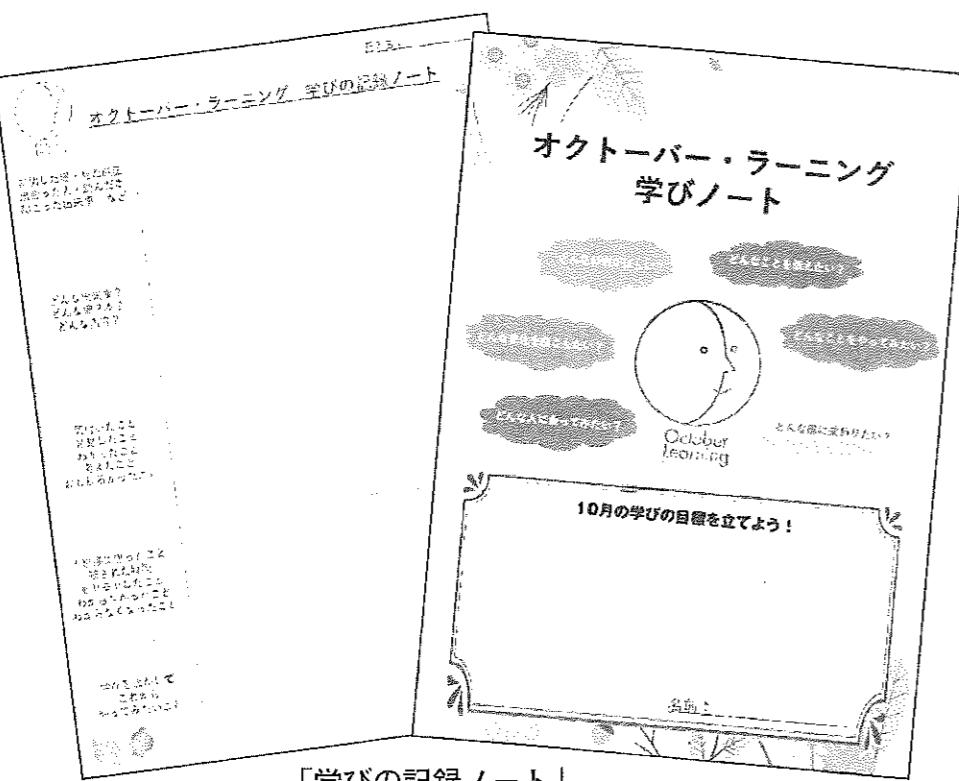
実際回していかなきやいけないとい

ともいっぱいあると思います。のんびり

民主主義をやつしているわけにもいかなかつたり。なんか楽しいということとはま

た違う理屈で動いてらつしゃるようなイメージがすぐあります。

井上…実際、やはり日々のいろんなこと



諏訪…その後に、不思議に思つたこと、残された疑問、モヤモヤしたこと、分からなかつたことを書いてもらつて、最後にその学びを生かして、これからやつてみたいことを書いてみてもらえるようにしています。

「休みます」というやり取りを電話でやることに追われていますが、学校と保護者の連絡ツールを入れたらお互い楽ですよね。

とにかく、理想に一步一歩近づけていくかということを考えないと、いけないと思います。

文科省にすごく提言したいと思うのは、あまりにもマンパワーで対応しきりなのです。

マンパワー以外のところで、今はいろんなソフトやツールがいっぱいあります。朝、教頭先生、教務主任さんは、保護者からの「うちの息子がお腹痛いから

校長が言つてゐるチーム担任制も、山形
でもやつていきたいのですけど、今、教
職員の志望者がすぐ減つている中で、
コミュニケーション能力の十分ではない
先生もいらつしやる。そういう人が担任
を持つと、結局ベテランの先生にすごく
負担かかってしまうのです。目の前のこと

「学びの記録ノート」

諫訪…なるほど。データを見て、その時を思い出して、その時に会っていた方、読んでいた本は何だろうと辿つていけるのは、いいですね。自分

井上：僕はスマートウォッチを付けて毎朝走っていますが、速度や心拍数などが分かるんです。走った場所もgoogleマップで分かつたり……。もう数年すると、感動している時の脳波、心拍数などの数値がデータとなつて、スマホに落ちるような気がするのですよ。

月1ヶ月、こんな人たちと出
んな気つきを自分で得ていた
のだ、こんな楽しいことをい
っぱい積み重ねてきたんだと
思うと、学ぶのは楽しいとか、
続けていきたいという風に思
つてもらえるのかなと思つて
います。

埋めなくていいのです。人に会うことって、なんなことがあつた、少しモヤモヤしたことがあるけれど、いつたことだけでもいいと思う。これを積み重ねていくことがで

記録していく」といふこと
上さんは最初に、1ヶ月の中で
曰かつたこと、出会つた人、読
とを書かれているという話をさ
私もほほほほ同じような形で
ることの方が多いです。そして、
していくこと自体がすごく学び
いる、振り返りにもなつてゐる

律である程度そういうソフトを
先生の底上げをしながらやつて
……。全部をマンパワーで解決
すると、そもそも人がいないの
しても質が下がつてしまふと思
う。すごく現場は、矛盾の中で戦
感じがしますね。

形市では、「デジ田交付金」（デジタル都市国家構想交付金）を駆使
ンバスの個別最適型のA-I教材（キユビナ）、リタリコの発達支
プログラミングのライフィズテンスなど導入していますが、
はまだまだ進んでいません。

ベテランの先生が1回作つたフ
トがあつて、そこから授業をや
徒の表情を見ながらできたら全
す。



井上…実は、以前、走るのは大嫌いだったのですよ。それがスマートウォッチをつけてから、楽しくなったのです。毎回、距離や記録が出るので、2ヶ月前と比べて、1分近く上がっているのを見るのは楽しいんです。

多分、これから進化して、人がどういう時に感動しているかとかも、血中の成分で感動していくことが分かつたりするのではないかと思うのです。

諏訪…本当に人によつて違うじゃないですか。どんな方と会つてお話ししたとし

などいうことで、「学びの記録ノート」(※)というのを作らせていただきました。井上：これ面白いですね。参加した場、見た映画、出会った人、読んだ本、起つた出来事……。いいですね。

最近、学びの記録というのは一体何だ
ろうと考えていたのですが、「講座についつ出した」といったことを、スタンプ集めるような感じでやっていくことが、学びを積み重ねることではないと申つています。社会教育的な学びは何だろうと思つてみると、自分の心が動いた、分からぬことが起きた、不思議に思った、面白かった、そういうことを記録していくこと、ある意味「日記」のようなものでいいと思うのです。そういうことを記録できるようなノートがあつたらいい

と思っています。月1というペースで自分の活動を見直して、今月はこれに心が動いたのだな、ここが面白いと思ったのだなどという振り返りになつていてると思います。「講座に参加しました」といつたものばかりではなく、日常の中の些細なことが意外と1番印象深かつたりすることがあります。そういうことも含めないと、「学びの記録」というのを残していくことといいのかなと思っています。

でも、すごく面白かったと思う方と、違う風に捉える方がいるので、「100人いたら、100通りの学びの記録ができる」と思っていて、すごく面白いと思うのです。

●「やつた方がいいよね」はやらない

井上・慶應義塾大学の前野隆司先生の幸福学の本を読んでいると、人間が幸福になるには「ありがとう、やつてみよう、なんとかなる、自分らしく」という4つの要素があるということなのです。

私は、この中で「やつてみよう」という要素が1番大事な気がしています。「やつてみよう」ということで、この間、シートウ・サミットと言つて、カヤックやつて、自転車で登つて、最後に登山するつていうイベントに参加したのです。

自転車で登つていると、自然への感謝、この場を作つてくれているスタッフ皆さんへの感謝が自然と湧き上がつてきます。一歩ずつペダルを踏んで「なんとかなる」ということ、かつて悪くても「自分らしく」だということも、だんだんしつくりきました。同じ話を聞いても、この人から何かを学ぼう、この人と会えて傾けた方がいいと思うのです。「別にいいじやん」という選択肢があつていい。どうしても苦手だから体育大会には出たくないなら、それはそれでいいのではないかなと思うんです。

諏訪・本当に、学校も余白が必要だと思います

井上・社会もね。

諏訪・大人もそうだと思っています。「やつてみよう」となかなか思えない。倒れたら「もういいや」となつちやつていて、起き上がりつて「やつてみよう」と思えるような余白がないのかなと思つてあります。

井上・私の場合は、総務省から各自治体に出向すると、だいたい2年くらいになります。山形は2年を過ぎましたけれど、限られた期間なので、この季節、この時期のものを思いつき楽しもうということがあります。

山形の紅葉も、美しい紅葉も、この時期に散策しないと楽しめない。大阪出身だからほとんどスキーはしたことがないけど、12月なつたらスキーをして、せつかくだから2級とりたいとか。季節感というものは「やつてみよう」につながっていますね。

「ありがとう」と思つて臨んでいると、いう風に思われるものがあるんだと思います。スマホをいじりながら、中途半端に聞いていると、すごくいい人がいい話をしても、あんまり響かないかもしれないですね。

諏訪・国分寺で、投票を盛り上げようという活動をやつているのですけど、投票率を上げようという活動なので、すごく社会的に意味があるからやつてているといい風に思われがちなのです。国分寺のために、未来のためにではあるのですが、ほほほほ「やつてみよう」とか「やりたい」でしか動いていなくて、自分たちの手触り感があるというか、すごく近い感触のところの「やつてみたい」でしかやらないのです。

私たちがよく言うのが、「やつた方がいいよね」という言葉が出た瞬間に、「それはやめよう」としています。「やりたい」とか、「やつてみよう」と思うものしかやらないという風にしています。

井上・「やつた方がいいよね」というのは、社会なり、規範がそう言つていることであつて、自分自身がやりたいではない。

諏訪・そうなんです。ただ、「やつた方ができないんだ」ということを思つています。

諏訪・そうですね。時期的な制限というのはありますよね。一方で、まちという単位だからこそやれることがあると思つています。

私は今、「シェアリング・ラーニング」という団体で活動しています。2022年に取り組んだ講座が「半径5メートルのミンシュシュギ」という言葉をテーマに、3回連続講座でやりました。1回目は、「政治学者、PTA会長になる」という本を書いた岡田憲治先生にお話していただき、2回目は、PTAについてしっかりとと考えて、3回目は主権者教育をテーマにやりました。

民主主義というとすごく大きな言葉ですが、半径5メートルの距離感で顔を合わせて一緒に活動すると、次会つた時に、「この間、お会いしましたよね」と言えるぐらいの関係性になつていく。その中の民主主義の面白さはきっとある、と思っています。

がいいよね、苦しいよね、でも、やっぱりいたいんだよね」というものが湧いてくるものは、やれるのでやるんですけど。ただの「やつた方がいいよね」になつているものは、やれないのです。特に、選挙は時間が短いしゴールが決まつてるので、その期間中に盛り上げ切らなければいけないとなると、やれることは限られてしまうのです。

私たちは、ボランティアというか、お金をもらつているわけでもないし、仕事をでもなくして、本当に市民としてただ好きでやつてているだけなので。本当に自分が「やつてみたい」と思うものでないと、やれないというところで、やつています。

4つの要素「ありがとう、やつてみよう、なんとかなる、ありのまま」といふお話を聞きながら、そういう風にやつてあるから、私たちは楽しくやれるのだなと思いました。

●「やつてみよう」と思つには

諏訪・何から「やつてみよう」になるかは、多分、人によつて違いますよね。

井上・今の学校は、あまりにも詰め込みすぎで、もう少し余白があつてもいいし、子どもたちのうちにある「やつてみよう」

の中にはあるのかなという印象がすぐあります。それが、「やつてみよう」と思える感じの1つにつながつているのかな……。

時間的に、選挙だと1ヶ月しかない、1週間しかない、今しかないということと同じぐらい、このまちという小さい範囲の中だからこそ、顔が見えるから励まされるとか、あの人気がいるから、あの人のために一緒にやつてみようかなと思つてはいる。その実感として、自分が持つている手触り感が、「やつてみよう」と思うことの1つのキーワードとしてもあるのかなと思っています。

井上・スウェーデンでは、いかに民主主義の担い手を育てるのかということが、教育の1番の目標になつていて。学校で、校則や修学旅行はどこに行くかなどを、みんなで対話して決めていくということですね。

日本の場合は、お任せ民主主義になつていて、グラウンドの外でビール飲んで騒いで、批判をしているのですが、プレイヤーになつた方が楽しいと思うのです。

それは政治に対しても、社会に対しても、批判をするのはある意味楽なんです

けど、自分自身も含めて劣化しちゃうんです。

私が最近心がけているのは、知らない人のことは批判しないし、知っている人の悪口は言わないということ。できる限りそういう気持ちでいますね。

今、ネットですごく反射的にいろんなことに反応する人がいっぱいいますけれど。その背景には実はいろんな事情があるし、記事になつていなかることもあるか



人のことで、いろいろなことができたりしていいのでしようけど、なかなか難しいところはあるのかなと今思っています。

● 今あるものを考え方

【諒訪】10月1日に「社会教育アワード」で表彰をされた方が集まって話をさせてもらつたのです（※）。その中に劇場の館長さんがおられました。その方が「文化は地域のつながりの根本になる。文化で町づくり、地域づくりをやつていける」という話をされていたのが印象的でした。文化という言葉は、すごく曖昧な言葉ではあるのですが。文化からまちづくりとか、人と人がつながっていくということであれば、そこに学びが生まれていくことになつていくのかなと思います。そのひとつとして、文化というものはあらうと思います。

【井上】文化という言葉は少し手垢がついています。文化住宅、健康で文化的な最低限度の生活とか言つてしまふと、ボトムラインのような感じなのです。もつと芸術、クリエイティブ、創造性とか、本來、そういうことだと思うのです。諒訪：創造性みたいなところというのは、本当にそうかもしれないですね。人

もしない。もう少し考えたらいし、もうちょっと自分自身も当事者になつて考えてみて、行動していけばいいのだと思います。

最近、政治家の「あれが悪い」とか、いっぱい言いますが、それは鏡の表裏で、実は民主主義である以上は、独裁国家ではないので、自分たちも劣化しているということでもあります。

● コロナ禍でよかつたこと

【諒訪】コロナ禍になつたとき、いろいろなものが閉じたじゃないですか。でも、逆に面白いオンライン企画が湧いた時期だつたとも思っています。みんなが一気にZOOMを使えるようになつて、ZOOMで対話ができるようになったのもその1つでした。

友達がやつた企画で、今は一緒に温泉に入れないけど、ZOOMをつなぎながらそれでお風呂に入つたら温泉に入つた気持ちになれるのではないかと、オンライン銭湯（オンライン）をやつたのです。やつてみたら男性しか集まらなかつた。じゃあ私が主催しようということで、女湯編をやつてみたのです。ハウリンゲしたり、まともに喋れないとか、色々あつたの営みというか、文化とは何だろうと考えいくと深いですね、文化をテーマに哲学対応をやりたくなりります。

近藤さんは、「リ・デザイン・社会教育」、社会教育という言葉を問い合わせるといつた話をされていると思うんです。先ほどお話しに出た工藤先生の「学校の当たり前をやめた」のも、ある意味、学校を問い合わせ直そうということでした。なんとか、今の社会の中で概念的に出来上がつてしまつているものがたくさんあります。それが精一杯みたいな状態になつている気がするのです。

でも、そういう出来上がりすぎています。消費するのは、全然面白くないと私は思つてしまふ。「文化をいっぱいやつている人です」となつても全然面白くない。だから、文化とは何だろうということを問いかけていくのが大事なのかなと思います。

【井上】スタンプラリーをしているみたい。

井上：犯罪とか、人に迷惑かけるとか、そういうことでなければ、なんでもやつていいと思いますよ。

【諒訪】よく手順を無視していると、怒られます。オンライン銭湯は、さすがに家族とか友達にも「何やつてんの」と笑われましたけど、とても面白かつたです。そういう企画から、オンラインで感じる距離感や連帯感と、リアルで会うことはどう違うのかというようなことがわかつたりもしました。

そんな感じで、いろんなことを試せる時期だとは思つていたのです。ただ、社会教育行政的には、全部止まつてしまつた時期なんですよね。そういう側面もすごくあるなと思う一方で、コロナ禍で豊かになつた部分もあつたかなという風には思つてします。それがうまく連鎖して

【諒訪】そうです。達成感はあるのかもしれませんけど、それは面白いのかなと思うところがすごくあります。そこを問い合わせるのだろうかとも考えてみたいですね。

社会教育と言われているものがあるけれど、自分なりの社会教育は何だろうか。雑誌『社会教育』にあるものが、もしかしたらそれがあるのかもしれないとか。社会のあれこれを問い合わせしていく、紐解いていくような……。

今、多くのものが出来上がりすぎているからこそ、問い合わせしていく、紐解いていくという作業が、今、一番のクリエイティブティビティというか、創造的なものかなという風に思つたりします。

【井上】まさに問い合わせすことですね。最初に申し上げた体育祭も、本当に中学校全体で今までいいのか。文科省の予算をもう少しデジタル化にして、底上げしなくていいのか、あまりにマンパワーに頼りすぎないのか、「リ・デザイン」することが大事ですね。

たのですが、終わつた後にもう1回集まつたら、謎の連帯感が生まれていました。井上：諒訪さんのいいところは、自分自身で提案して行動して、何事も楽しめることがあります。

【諒訪】「やつちやおう」というのはありますね。やつてダメなことはないと思つてるので。けつこうよく怒られるのですけど。

ど、同じことを全国どの学校でもできますというのは、少し違うなと思っています。事情も違うし、人も違うので、その人たちがやっていることの要素を学んで、自分たちなりのものを作ることができるはずだと思います。

そのまんま同じものを持ってきて、ボ

ンと当てはめてやるというのは、できるわけではないとすごく思っています。

井上・麹町中学校は、工藤校長の卓越したりーダーシップもありますし、いい先生も集まっています。岸田総理を含めいろいろな方が卒業生にいて、そういう人たちが応援しやすい環境だつたのです。

もちろん、卒業生のコミュニティをうまく活かしたのは、麹町中学校のすごいところですが、全国どこでもできるかというと、難しいかもしませんね。

諭訪・自分の得意なものが何か見極め

て、どう生かすのかという話だと思うのです。それは学校もまちも、自分たちが持つているところは何だろうというところを見ていかないといけないと思います。

井上・一部だけを見て、「あつちはいいな、いいな」と言つていると、実は自分がなかなか出会えない、分からぬ状況だというのはすごく感じます。

井上・違う優先順位がある中で、お互い重なるところもあるし、そこを広げていくかとか。AさんとBさんは言つていることは違うけど、この分は合意できるし、もつとAさんとBさんの100パーセントでなくともある程度解決できるようない答案を一緒に作り出していくというよ

うなことですよね。

井上・自分の考えが変わっていくのは、議論で負かされるのではなくて、実は考えが変わって広がって深くなつていくつことなので、本当は喜ぶべきこと。考え方を変えてくれていることに感謝すべきことなんですね。

今日も諭訪さんとお話ししながら、諭訪さんの原動力というのは、「自分たちで提案して行動しようよ、やってみようよ」、やりたいなどということにあるのだなと気づきました。私も、そうありたいなど思いました。

諭訪・ありがとうございます。そうなの

たちが貧しくなつてしまう。
いいどこだけ見るのは、簡単なんですが、もつと全体像や背景を見ないと。いいどこだけ見て、こつちは遅れているというのはダサい。メディア・リテラシーが必要だと思いますね。

●主張の違いを超えて、新しいものを

諭訪・最近、私の友人が選挙で、市議会議員さんになつたのです。面白いママさんではあるのですが、普通のママさんです。3人の子育てをされて産後2か月で挑戦した感じで、応援していました。

彼女が、半年ぐらいで2回市議会が終わって、「議員になつて議会を見て、いろんな方々の主張と、その中でバランスを取つてどういう風にやるのか、予算をどうするのかを全部見てみたら、こんなにこの市はやつてくれていたのだということが改めて分かつた。そしたら、市に

ありがとうという気持ちがすごく出てきた」という話をしていました。その上で、「優先順位をどうつけるか」という話がすごく大事なのだ、ということが分かつた。その優先順位には答えがない、正しい答えはないので、それを話し合つていく対話が、本当に1番大事なのだと感じた

です、井上さんも、例えばまちの中で色々話を聞いてみたら、すごく絵を描くのが得意な方がいた時に、「いいじやんいいじやん、やろうやろう」と言つて、多分一緒にその後やられていくんだろうなと思いました。

「いいね」と言つて、「できるよ」と言つて、「やろうよ」と言つて、その時に「じゃあバイバイ」ではなくつて、「やろうよ」と言つて、一緒にやつていくといふ姿が目に浮かぶような。それでやつていくと、多分いろんなことができていくし、すごく面白くて、いろんな方と出会っていく。井上さんは、そうやっていろんな方を励ましながら、一緒にやつていくことをひたすらやつて、やり続けている。だから、連載の中でも、次から次といろんな方が出てきて、いろんな取り組みのお話が出てきて面白いですね。

私自身は、「やつてみたい人」ではあるのですが、それだけではなくて、もつと他の方に「いいじやんいいじやん」と言つながら、一緒にやつていくということも大事なことだなという風に、お話を聞きながら思わせていただきました。

これは、そこまで入つてみないと、なかなか思いにくいと思います。市議会議員さんは自分ごととして、議会で決議をしないといけない立場なので、そういう市風に思えると思いますが、そうでない市民の立場では、そういうことはすぐ思ひにくい。

自分の今の状況は困つてているので、私をどうにかしてほしい。でも、私をどうにかしてくれた結果、他に困る人がいるかもしれません。3人の子育てをされて産後2か月で屈で動いていると思えるかどなうのは、かなか一市民だと想像が及ばない。

それはどうしても仕方がないことだし、それが別に悪いことだとは思わないのですが、「そういうこともあるよね」という風に思えるかどうか。そういう理由で動いていると思えるかどなうのは、かなか一市民だと想像が及ばない。

私が、まちの中でいつも面白いと思うのは、私がこんなにこうしてと言つても動かないのは、もう少し違う理屈が動いていた、優先順位の違いがあつたからだ、といったことがわかつた瞬間なんです。といったことがわかつた瞬間なんです。

なるほどこれは面白いなど。そういうことに注目するローカルなメディアがあつたらいとも思いますし、今の状況だと、

https://www.socialedu.net

オクトーバー・ラーニング2023とは

オクトーバー・ラーニングとは、2023年10月1日から31日までのひと月を「生涯学習月間」として、食欲の秋、スポーツの秋と同様に、「学びの秋」として、オンラインや対面など、さまざまな方法で本誌連載執筆者等と「学びのイベント」を開催しました。セミナーだけでなく、ひと月の学びの記録と成果を共有し、報告し合う対話イベントも行いました。

